

報道関係各位

岩手県立大学ソフトウェア情報学部

第60回吉川英治文化賞受賞による岩手県知事表敬訪問

ソフトウェア情報学部の伊藤史人講師が第60回吉川英治文化賞の受賞報告を目的として、岩手県知事を表敬訪問します。本受賞の表題は「視線入力技術で重度障害児・者を支援する大学講師」です。岩手県立となん特別支援学校等の子ども4名および保護者が同行し、知事に視線入力のデモを行います。

記

- 1 日時 5月22日（金）14：30－14：45
- 2 場所 岩手県庁3階
- 3 内容 受賞報告および視線入力デモ

14：00 県庁1階に集合

14：30 開始・名刺交換

14：31 出席者紹介

14：32 伊藤史人から御報告

14：34 知事から

14：36 懇談

14：43 記念写真撮影

14：45 終了

※終了後、適宜ぶら下がり取材

- 4 留意事項 添付資料あり。

【問合せ先】岩手県立大学ソフトウェア情報学部

講師 伊藤史人 ito_f@iwate-pu.ac.jp

■講談社が推進する文化事業

- 野間文芸賞 (一般財団法人 野間文化財団)
- 野間文芸新人賞 (一般財団法人 野間文化財団)
- 野間児童文芸賞 (一般財団法人 野間文化財団)
- 野間出版文化賞 (一般財団法人 野間文化財団)
- 吉川英治文学賞 (公益財団法人 吉川英治国民文化振興会)
- 吉川英治文庫賞 (公益財団法人 吉川英治国民文化振興会)
- 吉川英治文学新人賞 (公益財団法人 吉川英治国民文化振興会)
- 吉川英治文化賞 (公益財団法人 吉川英治国民文化振興会)
- 講談社絵本賞
- 講談社漫画賞
- 講談社 本田靖春ノンフィクション賞
- 講談社科学出版賞
- 野間文芸翻訳賞



KODANSHA

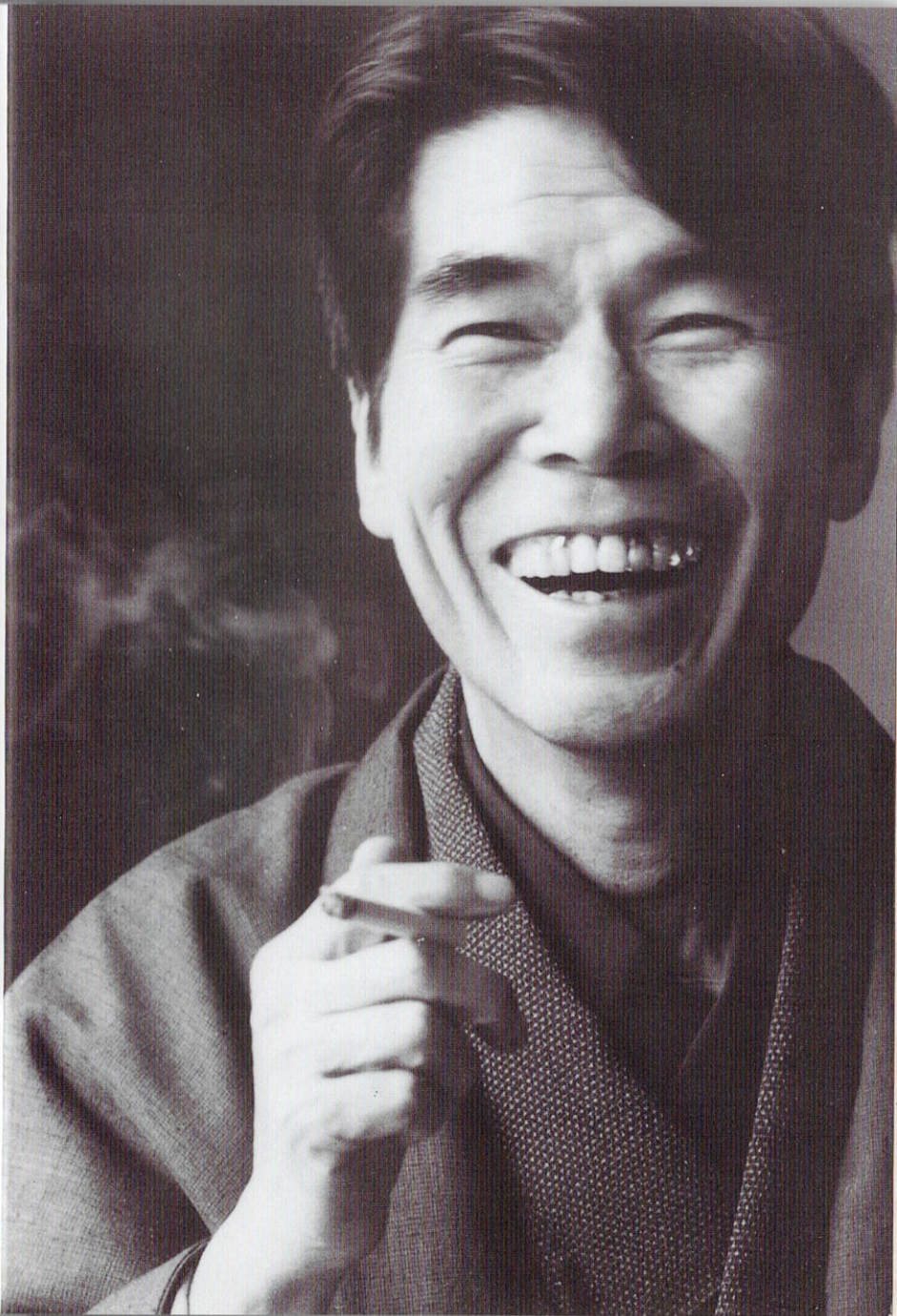
令和八年四月十日

吉川英治賞

令和八年度要項

- 吉川英治文学賞 (第六十回)
- 吉川英治文庫賞 (第十二回)
- 吉川英治文学新人賞 (第四十七回)
- 吉川英治文化賞 (第六十回)

公益財団法人 吉川英治国民文化振興会



吉川英治賞について

公益財団法人吉川英治国民文化振興会は、日本の典型的な国民文学作家として、広く読者に親しまれ尊敬されてきた、故吉川英治の偉業を記念して設立されたもので、故人が生前ひそかに希い続けていた遺志をうけて、昭和四十二年以来「吉川英治文学賞」と「吉川英治文化賞」を設定してきました。この二賞に加えて、昭和五十五年より「吉川英治文学新人賞」、平成二十八年より「吉川英治文庫賞」を新たに設けました。

吉川英治略歴

一八九二年（明治二十五年）八月十一日横浜市生まれ。二十二歳のおり、講談倶楽部の懸賞小説に『江の島物語』で応募し一等当選となる。少年文学の傑作となった『神州天馬俠』をはじめ、七十歳で筆を絶つまでの生涯に『親鸞』、『宮本武蔵』、『三国志』、『新・平家物語』、『私本太平記』、『新・水滸伝』など多くの作品を発表し続けた。衆生の幸福を追求する熱い情熱と理想を持ち続け、あらゆる世代に愛され、まさに大衆とともに歩む人生であった。一九六〇年（昭和三十五年）文化勲章を授与され文化功労者となる。一九六二年（昭和三十七年）九月七日死去。東京都、多磨霊園に眠る。

目次			
吉川英治賞について……………	3	選評	辻村深月……………35
吉川英治文学賞の要項……………	6	選評	村山由佳……………37
吉川英治文学賞(第六十回)受賞作品……………	7	吉川英治文化賞の要項……………	42
受賞のことば 朝井まかて……………	8	吉川英治文化賞(第六十回)受賞者……………	43
選評 浅田次郎……………	10	受賞者経歴 アダチ版画研究所……………	44
選評 北方謙三……………	11	受賞者経歴 伊藤史人……………	46
選評 桐野夏生……………	12	受賞者経歴 狩俣繁久……………	48
選評 林真理子……………	13	受賞のことば アダチ版画研究所……………	50
選評 宮部みゆき……………	14	受賞のことば 伊藤史人……………	52
吉川英治文庫賞の要項……………	16	受賞のことば 狩俣繁久……………	54
吉川英治文庫賞(第十一回)受賞作品……………	17	選評 田中優子……………	56
受賞のことば 石田衣良……………	18	お祝いのことば 山下裕二……………	57
吉川英治文庫賞候補作品/選考委員一覧……………	20	お祝いのことば 永見邦子……………	58
吉川英治文学新人賞の要項/候補作品……………	24	お祝いのことば 下地理則……………	59
吉川英治文学新人賞(第四十七回)受賞作品……………	25	吉川英治文学賞受賞者と作品一覧……………	60
受賞のことば 伏尾美紀……………	26	吉川英治文庫賞受賞者と作品一覧……………	64
選評 朝井まかて……………	28	吉川英治文学新人賞受賞者と作品一覧……………	65
選評 大沢在昌……………	30	吉川英治文化賞受賞者と業績一覧……………	69
選評 京極夏彦……………	32		

吉川英治文学賞 (第六十回)
令和八年度要項

令和八年四月十日

伊藤 史人氏

生年月日：一九七五年五月二十七日
住 所：岩手県滝沢市（岩手県立大学）

■視線入力技術で重度障害児・者を支援する大学講師

伊藤史人氏は、重度障害児・者支援システムおよびデバイスの研究開発を行っている大学講師だ。二十歳の時、趣味つながりでメールをやりとりしていた人と初めて会ったところ、全盲だった。相手は音声読み上げ装置や点字ディスプレイ、点字キーボードでメールを送受信していたそうで、会うまでまったく気づかなかった事実。「技術は障害を見えなくするのか」と衝撃をうけ、機械工学による障害者支援の研究に進んだ。

大学に籍を置きながらコンピュータ会社に入り、所属先と地元の大学との共同研究で医療用画像処理の担当になった時、大学で働くことの魅力を知る。その後大学を中退し、会社も辞めて、二〇〇六年に岩手県立大学の三年限定の研究員としてプロジェクトに関わりつつ、修士を取るために大学院に通った。

二〇一〇年に一橋大学の助教となり、ALS（筋萎縮性側索硬化症）の人を対象に、コンピュータを使ったコミュニケーション補助のシステム開発の研究をしていた。認知面の弱い子供を対象にテストしたところ予想以上に反応が得られ、家族はもちろん、医師も驚いたという。そういった重度障害者の研究を専門にするため、二〇一四年に島根大学に移った。

視線入力設備は以前は高価で一般家庭では手が出せなかったが、二〇一四年に二万円ほどの装置が発表された。だが、装置だけでは訓練をしないと使えない。

そこで伊藤氏は二〇一五年、目の動きからパソコンを操作できて、視線入力の訓練ができるゲームを開発し「EyeMoT」と名付け、風船割りや徒競走など約三十種類を研究室のサイトで無償公開を行った。今では全国の約千校の特別支援学校、および病院や家庭で使われている。

重度障害児は、脳波からも視力検査からも、意思の有無を確認できない状況が多く、医師や学校の先生に「わかっていない」と判断されてしまうことが多い。障害児の親は日々の微細な反応から「わかっているはず」と感じていたが、客観的な証拠がなく、周囲に信じてもらえない。それをEyeMoTが可視化し、それによって周囲の人たちの反応が大きく変わると、支援者にとっては心の支えになった。

伊藤氏は「EyeMoT」で二〇一七年に日本賞、二〇二三年に岩佐賞を受賞している。賞金はEyeMoT開発や支援時の交通費などに使用した。資金面では自費のため、クラウドファンディングにも助けられた。「賞を受賞したり、講演をしたりすることによって、視線入力で障害者の意識の汲み取りができることや、障害者に意思があることなどに対する認知を高めていきたい」と言う。

二〇一七年、伊藤氏は肺がんのステージ4の診断を受けた。手術による完治は難しいという。現在小康状態ではあるが、三ヵ月後にどうなっているかわからない。「目の前にある今できること、重度障害児の支援に関することを誠実にやっっていく」と語る。

重い障害があるため「何もわかっていない」と思われてきた子どもたちとの出会いの中で、私は「本当はわかっているのではないか？」と感じることが多々ありました。その可能性を信じ、「EyeMOT」を活用して現場に向き合ううち、それが「確信」へと変わる瞬間に何度も遭遇してきました。

多くの場合、変化のきっかけは周囲の大人が「わかった」ことでした。子どもの意思が可視化・客観化されることで、周りのまなざしが劇的に変わるのです。子どもは、誰かに自分の思いが伝わったと実感したとき、瞳を輝かせ、覚醒を高めていきます。小さな表出を周囲が拾い上げ、フィードバックを返すことで起きる現象です。私たちは、障害という「見た目」に騙されていただけなのかもしれません。

では、重い障害のある子どもたちと関わる意味とはどこにあるのか。例えば「病氣」は苦しいものですが、それを治そうとする研究は、私たちの身体への理解を深めてくれます。同様に「障害」は、社会のあり方を問い直す指針となります。障害の重い人たちは、身をもって社会の改善点を示し、テクノロジーの進歩を促してくれる存在です。未来の進化した社会とは、障害の重い人が人生を謳歌できる世界であるはずです。なぜなら、人は誰しも、いずれは病を得て、障害に向き合う時が来るからです。

私自身、二〇一七年に肺がんステージ4を宣告され、人生の制限装置が動き出しました。しかしそれは、活動を加速させる「ポモドーロタイマー」となり、私を今回の受賞へと導いてくれました。このような栄誉ある賞を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。



伊藤先生、吉川英治文化賞ご受賞おめでとうございます。

先生のご研究を私なりにひと言で表すとしたら「希望」です。

人生には予期せぬ事が起こります。時には全く嬉しくない形で。そんな時に生きる原動力になるのが「希望」だと思います。

七年前、夫は脳出血により一瞬にして全身の身体機能を大きく失いました。中でも深刻だったのは意志の疎通でした。必死に訴えているのに伝わらない、分からない。そんな真っ暗なトンネルの先に「希望」という光を照らしてくださいましたのが、伊藤先生と先生が開発された視線入力アプリEyeMoT（アイモット）でした。倒れてから約九カ月、初めて視線だけで風船を割る事ができた時、夫の目に灯った光を忘れる事はできません。その光は生きる力として今も私達夫婦を支え続けてくれています。

重度障がい児・者が抱えている課題はそれぞれですが、一人一人に向き合い寄り添われる伊藤先生のファンは国内外に沢山いて「伊藤縁」という繋がりや支え合っています。テクノロジと人、人と人が繋がるこの現象は、先生のホームページの名前でもあります『ポランの広場』の作者、宮沢賢治が願った「世界がぜんたい幸福」になる事へ続く一本の道になっているように思います。

この度のご受賞は、私達にとって大きな喜びです。先生からいただいた「希望」が、より多くの方に届くことを祈り、感謝とお祝いの言葉とさせていただきます。